

# 私の古典学習法

本誌審査委員 江崎 美里 〈前編〉

古典を見て自分の頭で考える



江崎 美里（えさき・みさと）



〈略歴〉

昭和39年 東京都生まれ  
師 水田 光風

東京学芸大学教育学部書道科卒業  
埼玉県立高校で非常勤講師（3校）  
文部科学省検定教科書小・中学校書写（日  
本書籍）執筆  
明治学院中学校・明治学院東村山高等学校  
非常勤講師  
カリタス女子短期大学非常勤講師  
  
現在  
津田塾大学書道部指導  
「香純会」主宰  
月刊「書写書道」課題手本執筆、審査委員  
公文書写筆ペン・毛筆教材手本文字執筆

書写の仕事を中心に活動し、「書写書道」では長い間硬筆の課題手本を担当してきた私が、この連載で古典学習について何を語れるのか？ とても悩みました。

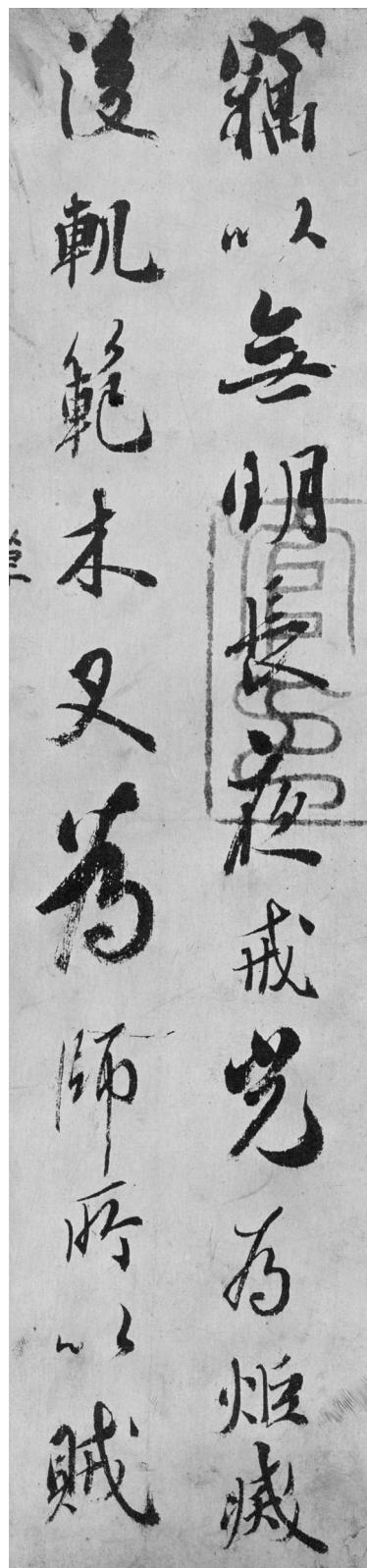
読者の皆さんへの参考になることが伝えられるかわかりませんが、私の好きな古典について、思い出と取り組み方を書きました



図版2  
『孔子廟堂碑』  
穏やかで温雅な書



図版3  
『九成宮醴泉銘』  
引き締まった字形と線、背勢の書



図版1『光定戒牒』  
高校生の時、初めて臨書作品として取り組んだ

最初に書の古典に触れたのは、高校一年の芸術科書道の授業…だったはずなのですが、実を言うと何の古典だったのか、どう感じた

## I 『光定戒牒』

取り組んだのが、平安時代の三筆の一人、嵯峨天皇筆の『光定戒牒』（図版1）でした。

最初に取り組むにはあまり取り組み易い選択ではありませんでしたが、何の知識も先入観もなかつた私は『光定戒牒』の変化に富んだ豊かで強い線にひかれました。半切に二行

## II 『孔子廟堂碑』と『九成宮醴泉銘』

長い間通つた書道塾の先生が、書道科受験のためには、もっと専門的な指導が必要だとおっしゃり、当時山梨大学教授の水田光風先生（元本誌特別顧問）を紹介してくださいました。

先生に『孔子廟堂碑』（図版2）か『九成

のか、あまり記憶に残っていません。子ども の頃から書道塾に通つて字を書くことが好きでした。まだ書に対する真剣な気持ちは持つていなかつたように思います。

高校二年の時、書くことが好きで、これな

らば（学科の勉強は得意でなくとも）努力で

きるかもしれない、進路を大学の書道科と心に決めて、高校書道部に入部しました。文

化祭に出品する臨書作品として初めて真剣に

書き、それまで半紙書きばかりしていた当時の私にとつては大作でした。今思うと、私自身の得意な種類の書ではないので自分の特徴とは違うものに憧れを持って書いていたのかかもしれません。

宮醴泉銘』（図版3）どちらか一つを選んで、臨書しなさいと教えていただき、私は『孔子廟堂碑』を選びました。この選択について私の硬筆の字をご存知の方は納得されるのではないかと思います。

『孔子廟堂碑』か『九成宮醴泉銘』は好みが分かれるところです。好みというよりは、その人の持つ線や性格で自然と自分に合う方を選択するでしょう。私の場合は、後に『九成宮醴泉銘』も学びましたが、厳しく強い線を書いているつもりでも私が書くとどうしても『九成宮醴泉銘』に見えません。

この時『九成宮醴泉銘』を選んで数多く臨書していたら、今頃強く背筋がピンと立った

字を書いているかもしれない…と思つたりします。皆さんにもそんな経験があるのでないでしょうか。

### III 「他人の字は真似しなくてよい」

水田先生はお稽古の度、いつもこうおっしゃっていました。「他人の字は真似しなくてよい」「古典をしっかり学びなさい」そう言いながら臨書手本を書いてくださいました。当時、高校生の私はその一見矛盾しているような言葉に戸惑いましたが、まずは先生の臨書手本

は横に置かず、古典の法帖を見て練習しました。

そして書いた後、法帖と先生の手本と自分の書いた作品を見比べるようにしました。見比べていると先生に見えているものと私に見えるものははずいぶん違つていて、表現の仕方も違うことに気づきました。自分の古典の見方の甘さを感じることも多くありましたが、基本的に自分の眼を信じて臨書するようになりました。「先生の臨書手本と似ていることが大切ではない。古典を見て自分の頭で考えることが大切なのだ」と考えていました。そうして書いたものを先生に見ていただき、



図版4-1 『雁塔聖教序』  
上の部分と下の部分の中心をずらしている

図版4-2  
中心をそろえて書いてみた例



自分の眼を確認する作業をしていきました。

先生から受けた具体的なご指導の中で印象

に残っているのは、「文字の中心」についてです。『雁塔聖教序』の臨書を先生に見ていただいたところ、中心が揃つてしまつていいご指摘を受けました。『雁塔聖教序』に限らず、多くの古典の楷書では、上の部分に對して下の部分は少し右にずれます（図版4-1）。当時の私は自分の文字感覚で、上の部分と下の部分をまっすぐに揃えて書いていたのです（図版4-2）。古典と自分の文字感覚との違いをはつきり認識した瞬間でした。

### IV 長鋒・濃墨・大字

大学書道科の実技の受験勉強は、「苦手な学科の勉強の気分転換を兼ねて堂々と書道の練習もできる！」という少し楽しいものでした。試験でどんな古典が出ても慌てるがないように、幅広く浅く古典の臨書をしていました。短期間に多くの古典に触れた貴重な時間でした。

その後、無事大学に進学できたのですが、そこで私は大きなショックを受け、それまでの自分の書き方を変えなければならなくなりました。その頃大学では羊毛長鋒の筆を使い

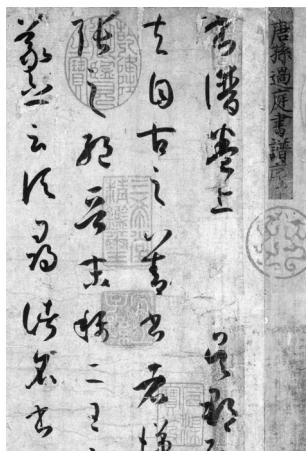
濃墨で書くのが主流でした。それまで私は兼毫筆、やや薄めの墨しか使ったことがなかつたので、羊毛長鋒濃墨に慣れることから始めなければなりませんでした。しかも、大学の芸術館の大きな壁面を活用して臨書作品も大きい物を制作するという当時の流れがありました。

大字の臨書は、実際の古典と同じ筆法では書けません。まして羊毛長鋒濃墨となれば筆を扱うことに注力することになります。自然な楽な書き方はできず、筆との格闘の日々となりました。

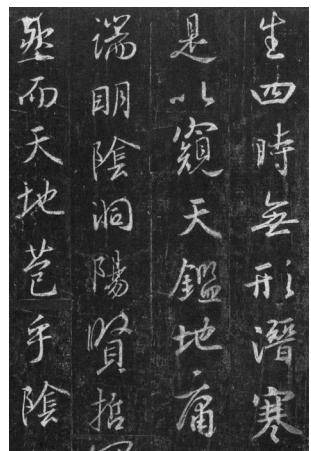
「なぜ、大字の臨書作品を書くのか?」「古典とは全く違う筆法で書くことで何が分かる



図版5 大学書道部の合宿



図版7 『書譜』



図版6 『集字聖教序』

のだろう?」との疑問もありました。しかし、大字の臨書に取り組み、羊毛長鋒濃墨で書くことで、筆の機能を知ることができ、作品を書く上で効果的な線を使えることを知りました。

図版5は、書道研究部の合宿で鄭道昭の『磨崖碑』を書いているところです。普段は取り組まない古典でしたが、合宿では遊び感覚を持って楽しみました。

長い休みには全臨の課題に取り組みました。『孔子廟堂碑』『集字聖教序』(図版6)『書譜』(図版7)など。半紙二字から四字書きの臨書では一字一字の結体のバランスをつ

かみなるべく自然に筆を運ぶことに注意しながら書きました。原寸大の臨書では全体の雰囲気と傾向やリズム感をつかむことを心がけました。大学に通いながら、氷田先生の下でのお稽古は回数こそ減っていましたが続けていました。扱う用具も表現方法も大学とは違うので、とても悩みながら通った記憶があります。しかし、先生は私が大学でやっていることを見守りながら指導してくださいました。そして変わらず、「古典をしっかりと学びなさい」とおっしゃっていました。

大学の先生方のご指導は、私たち学生が書いたものを批評してくださるということがほとんどで、基本的には手本を書いていただることはなく、添削された記憶がありません。学生同士で批評しあい共に育つてゆく。広い教室と書に没頭できる時間がある:素晴らしい環境を与えていただきました。

氷田先生のご指導と大学の先生方のご指導は、表現方法は違っていましたが、「古典を学びなさい」という点では何も違いがなく、多感なこの時期にこうした経験が数多くできることは私の大きな財産となりました。

後編では古典学習と書写について、硬筆作品に活かすことなどについてお話ししたいと思います。